

Be creative !



祝 野球部県ベスト8!

2021夏の愛知県高校野球の大会において、本校の歴史初のベスト8という成績を野球部がおさめました。彼らは、最後の最後まで相手に喰らいついていく粘り強い試合を展開しました。この野球部の大躍進を始め、きっと9月の始業式には、夏休み中の皆さんの活躍をたくさん報告することができるはずです。今、どの部活も大会の真っ最中。オリンピックに負けない「頑張れ!」の声援を皆さんに送ります。まさに一番熱い夏が展開されています。

今年度のサマーセミナーにて行われた弁論大会での、2年生高橋君の取り組みを紹介します。

第32回サマーセミナー特別企画・弁論大会 **優秀賞** (7月17日実施)

「未知のもの」ではなく ～義手とともに生きる～

日本福祉大学附属高等学校2年 高橋侑叶

「知らないこと」が誤解を生み、偏見や差別につながっていく。それを私は身をもって経験してきました。私は生まれつき、右手の手首から先がありません。中学校の担任の先生は毎年4月に「困っていたら手伝えてあげて」と私のことをクラスに伝えました。善意の言葉だったのでしょうか。しかし、「一緒にがんばろう」と声をかけてくれる同級生がいる一方で、「あの子は障害者だからできなくて当然だろう」「障害をもっていてかわいそうだ」という声が多く生まれました。私はその声を聞くたびに心をえぐられる思いがしました。下に見られている感覚を常に感じながら、自分がこの体で生まれてきたことは不幸なことだと思えて仕方がありませんでした。

人は、自分のものさしで測れない「未知のもの」に対して心の垣根を高くします。私は、日常生活で必要なことは、私のやり方で不自由なく行うことができます。できないことは、自分で言うことができます。しかし、「できること」を伝えるより先にかたまってしまった見方を変えるのはとても難しいことでした。「障がい者」という言葉がありますが、現在の社会の中ではこの言葉自体が障害を持つ人を外側へ区分するような印象があります。同級生たちの意識のなかでは私は「障がい者」であり、多くの人にあるものが欠けている、という偏った目が私に向けられることになりました。私が義手をつけ始めたのは中学の途中からですが、そのこともまた、同級生たちの目には「未知のもの」に映ったのだと考えています。

本来、義手は、障がいを持つ人が社会生活を円滑に行う上で必



要な手段のひとつです。技術の発達により、見た目では本物と大差のない義手が作られています。周りの人だけでなく、障害を持つ人自身の「人とは違う」という自分を卑下する感覚を軽くし、両者の心の垣根を低くするために役立つものです。しかし、それだけでは十分とは言えません。障がいを持つ人が「未知のもの」でなくなるために必要なのは、「障がい者」ではなく「ひとりの人」として周り人間関係を築くことをおいて他にはありません。

これは今、私が高校生活で実感していることです。私は、高校入学のはじめから義手をつけて登校する、と決めていました。それによって、私に対して「手がない」という印象を持つ人はおらず、私自身も堂々といられました。また、担任の先生は「一緒に過ごすうちに、みんなわかってくれるよ」と言い、私をことさらに心配することも特別扱いすることもなく判断を任せてくれました。私はとりたてて障害について話すこともせず、しばらくしてから友人に義手だと伝えると、「そうなんだあ」というそっけない反応で、こちらが笑ってしまいました。私が、本来の「私」として気兼ねなくふるまえたことで、クラスでは当たり前人間関係ができていきました。私が「未知のもの」という目を向けられることはなく、後から障がいがあることを知っても、人間関係が先にあることで自然に受け入れられていきました。私は、義手に助けられながら、心置きなく過ごせる場所を見つけたのです。また、所属している水泳部では、私と同じような障がいを持つ先輩がいます。障がいを持つ私が泳ぐことは、部員たちにとっては当たり前のことで、ここでも私は「未知のもの」ではありませんでした。

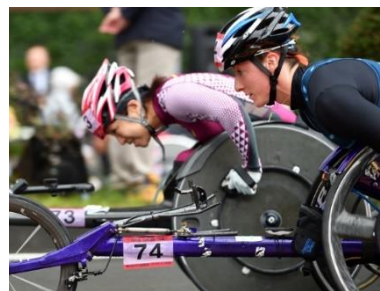
今、私の周りには、私に「障がい者」というものさしをあてる人はいません。進級した2年生のクラスでは、おそらく半数くらいは私の義手に気づいていません。それは、私にとってとてもうれしいことです。一年生では代議員、現在は生徒会会計を務めています。誰も私に「できなくて当然」とは言いません。山のような仕事は容赦なくやってきて、仲間たちと奔走する日々を送っています。この忙しさが、私の充実感を支えています。

障がいを持つ人が「未知のもの」でなくなることによって、偏見や差別はなくせる。私は、自分自身の経験からそう考えます。進化を続ける義手は、その大きな助けになるものであると同時に、新しい可能性を広げるものです。そして、私は将来、医療系の道へ進みたいと考えています。水泳部の先輩のように、私が前例となることで、障がいへの理解を広げるとともに、義手をつけて生きる自分だからこそできることの可能性を、この手で広げていきたいと考えています。

今月の言葉 「Ya sama！」—私はできる

タチアナ・マクファデン (パラリンピック選手)

ロシア生まれ。二分脊椎症による先天性下半身不随。6歳までロシアの孤児院で育ちますが、米国人に養女として引き取られます。孤児院で過ごしていた頃、自由に動けない自分に苛立ちを感じた彼女は工夫をします。自由に動きたい！自分の意志で自分の行きたいところに行くためには、そうだ、手をつかえばいい。彼女は逆立ちして移動する手段を手に入れます。この時、「Ya sama！」の思いが芽生えます。米国移住を機にスポーツを始め、車いす陸上で頭角を現します。彼女はいつもこの言葉をかけて自分を励まします。「Ya sama！」



(写真右側がマクファデンさん)